



張資平初期作品における私小説的要素：『沖積期化石』を中心に

史, 雨

(Citation)

海港都市研究, 18:17-37

(Issue Date)

2023-03-27

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482803>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482803>



張資平初期作品における私小説的要素

——『沖積期化石』を中心に——

史 雨

(SHI, Yu)

はじめに

大正期の日本に留学した中国人留学生は、医学や工学など、実学を学ぶことを通じて、国家の近代化を目指した。その中であって日本の近代文学と接触し、実学から文学へと辿り着き、実学を超える意味を文学の中に発見する青年もいた。その代表的な活動のひとつが、日本留学生によって東京で結成された創造社である。創造社（1921年に郭沫若、郁達夫、張資平、鄭伯奇などの留日学生によって東京で設立された新文学団体）の設立メンバーで、数多くの恋愛小説を書いた張資平（1893～1959）は、従来の文学史において毀誉褒貶の交錯する作家である。人間の欲情を強調し、三角関係の恋愛小説を量産し、多数の青年読者を魅了したベストセラー作家であったが、男女関係の描写によってときに卑俗な作家として批判されることもあった。しかしながら、張資平の初期作品については新文学の小説の中でも水準が高いもので、描写技巧が成熟している〔張 1995:240〕との指摘もある¹。張資平は1912年に日本留学を開始し、1922年に東京帝国大学を卒業して帰国した。張の帰国前の作品の特徴について、郭沫若は、「資平は自然主義の傾向を持っている。だから、創作にはまず観察が必要だと言った。私は浪漫主義の傾向を持っている。だからすべて直感に基づいて自分で創作することが必要なのだ」〔鄭 1933:15〕²と述べている。

このように、張の留学時期の作品は、同じ創造社の同人の眼からは、写実主義あるいは自然主義の傾向を帯びたものとして見えていたことがわかる。

蔡曉軍は「田山花袋の『蒲団』以来の小説は、もっぱら作者自身の身の辺のことだけに限

¹ 張競「苦しい模倣の歷程—張資平の恋愛小説と田山花袋」〔『近代中国と「恋愛」の発見』、岩波書店、1995年、240頁〕。

² 鄭伯奇『中国新文学大系・小説三集・導言』（上海良友圖書公司、1935年、15頁）。〔初出：郭沫若『創造十年』（上海現代書局、1933年。）〕原文：「資平は傾向自然主義的，所以他說要創作先要觀察，我是傾向浪漫主義的，所以要全憑直覺來自己創作。」

られた。…多分この風土に染み込んだ創造社の同人に共鳴を起こしただろう。彼等〔創造社同人〕の初期小説のほとんどが「身の事情」に取材した。」〔蔡 1996:70〕³と述べる。創造社同人の初期作品はほとんど作者自身の経歴、あるいは作者の身に発生した些細な出来事に取材したものであり、「自己の身の随筆的な小説、いわゆる身辺小説」⁴と呼ばれたものである。このように、創造社の身辺小説は日本の私小説との密接な関係を想起させる。

多くの先行研究において、例えば、周海林は創造社の身辺小説の私小説に似た風格、創作方法などを考察した〔周 2016:32-37〕⁵。蔡曉軍は創造社の身辺小説と私小説の関連性に絞って、創造社同人の初期作品における『蒲団』の模倣を検証した〔蔡 1996:70-73〕⁶。卞立強は創造社を中国の文壇における私小説派の代表として指摘した〔卞 1991:308〕⁷。また、本稿の考察対象である張資平の身辺小説と私小説の関連を論じている研究者もいる。張競は『蒲団』と『約檀河之水』の表現方法の共通点を通じて、張資平の田山花袋の受容を分析した〔張 1995: 253-259〕⁸。周海林は張資平の帰国後の作品『冰河時代』、『寒流』、『百事哀』などの身辺小説が私小説と類似すると指摘している〔周 2016:238-242〕⁹。

しかし、以上の先行研究は創造社の身辺小説が私小説の影響を受けたと示しているが、私小説をどのように受け止めたのかという具体的な論証がまだされていない。本稿は、張資平の留學生活の経験に基づいた初期作品『沖積期化石』を取り上げ、私小説の方法がどのように取り入れたのか、当該作品からいくつかの描写を取り上げながら、私小説的要素を分析してみる。また、作品に私小説の特徴と異なる部分がある場合に、作品の独自性がどこに表現されているかという点に注目し、改めて分析することとする。

³ 蔡曉軍「創造社文学の形成と日本—同人と日本との関わりを中心に」（『実践国文学』 49、1996年3月、70頁）。

⁴ 注2所掲書、14頁。原文：「自己身邊的隨筆式小説，就是身邊小説。」

⁵ 周海林「創造社の“異質性”—日本文学的存在」（『創造社与日本文学—關於早期成員的研究』、上海社会科学院出版社、2016年、32-37頁）。

⁶ 注3所掲論文、70-73頁。

⁷ 卞立強「中国と日本の文学における作家の自我—私小説を中心として」（『京都外国語大学研究論叢』 37、1991年、308頁）。

⁸ 注1所掲書、253-259頁。

⁹ 周海林「張資平与日本文学」（注5所掲書、238-242頁）。

1 私小説の判断基準

本論に入る前に、考察の前提となる日本の私小説の定義について確認を行いたい。私小説についての先行研究は極めて多い。本稿でそれらを逐一紹介することは紙幅が許さないなので、「私小説言説」を整理した重要な研究である 1990 年代に発表された、キルシュネライト『私小説—自己暴露の儀式』に見える私小説に対する定義に従うこととする。私小説に関して、キルシュネライトは、私小説を特徴づける要素として、「事実性」と「焦点人物」を挙げている〔キルシュネライト 1992:249〕¹⁰。

氏によれば、「事実性」とは、「日本の読者の視点から見て想定される、文学作品と実際の現実との関係」のことであり、作品は、「作者が経験した現実を直接再現」したものである。

ここでは読者の役割が想定されていると考えられる。読者は書かれた現実と実際の現実との関係を想定し、作者に対してある程度の理解を持つ。続けて、氏は「焦点人物」について、「「焦点人物」は、一人称の語り手と主人公と作者との単なる連合体以上のものである」と述べる。私小説を読者という観点より分析するのであれば、読者がある作品を私小説と見なす基準、読者が何によって私小説と判断するのかについて、さらに検討する必要があるであろう。

キルシュネライトは「事実性」を説明する際、「宇野浩二は実際、この「事実性」という基本的条件を、作者と読者の間の一種の暗黙の了解として描いているからである。……彼はこうした了解の成立を、読者の視点から見た読書過程をもとに描いているのである」〔キルシュネライト 1992:240〕¹¹ と、宇野の観点に基づいて「事実性」の特徴を捉えたのである。またキルシュネライトは「事実性」に関して、「事実性とは、作家が特定のテキスト信号によりそれとわかるようなかたちで作品の「現実依拠性」を示し、それに対して読者があらかじめ信頼を置いていることを言うのである。」〔キルシュネライト 1992:240〕¹²と指摘する。特定のテキスト信号も、主人公・作者の経歴などの事実も、「現実依拠性」を示すテキスト信号として機能する。つまり、読者は小説における特定のテキスト信号あるいは作者に関する予備知識によって、私小説として読む。また、小説における特定のテキスト信号について、キルシュネライトは再び宇野浩二の観点を引用した。宇野はそれが「無媒

¹⁰ イルメラ・日地谷＝キルシュネライト『私小説—自己暴露の儀式』（三島憲一〔ほか〕訳、平凡社、1992年、249頁）。

¹¹ 注10所掲書、240頁。

¹² 注10所掲書、240頁。

介な、いかなる論証の情報によっても準備されていない、もっぱら自分の感想を書き付けるばかりの一人称の主人公の登場」[キルシュネライト 1992:241]¹³という描写を多用する。そのため「私」なる人物が登場し、自分に十全の注目を向けるよう要求するのであるが、その人物は読者に対してはなんの顧慮も払っているようには思われない」[キルシュネライト 1992:242]¹⁴というのである。それはキルシュネライトが提起した、私小説の第二の構造要素である「焦点人物」に対応している。氏によれば、作家は、一人称の語り手であり主人公でもある人物に、けっして一般読者のほうへと視線を向けることを許さない[キルシュネライト 1992:242]¹⁵という。ここで、氏は一人称の語り手にしか言及していない。実は彼女の考えでは、「一人称形式か三人称形式かという区別がなんらのジャンル固有の意味ももたないことを示している。なぜなら、決定的なのは人称代名詞ではなく、語りの視点だからである。」[キルシュネライト 1992:253]¹⁶とあり、語りの視点とは、主人公と語り手が共有の視点を保っていることを指す。さらに、注目に値するのが、「焦点人物」は「事実性」の上に立脚していることである。

このように、私小説テキストには、読者が既に把握した作者に関する経歴などの客観事実のほか、語りの視点（主人公と語り手の共有の視点）という事実性を示すテキスト信号が存在する。テキスト読解過程において、読者は両者の事実性を示すテキスト信号によって、ある小説を私小説と判断するのではないかと考えられる。次節から、『沖積期化石』に私小説の事実性を示すテキスト信号が存在するかを検証する。

2 『沖積期化石』とその背景

まず本小説の主な内容及び背景について紹介する。1918年、熊本の第五高等学校三年生の時に、張資平は日本での留学生活に基づき、『沖積期化石』執筆を開始した。

張の回想によれば、「大学一年生前学期に、『沖積期化石』冒頭の数篇を郭〔沫若〕に送り、教えを乞うた。題名は『彼の生涯』であった。郭は、『彼の生涯』は俗っぽいと返信してくれた。そこで、私は『沖積期化石』に変えたのだ。」[張 1933:225]¹⁷とある。1921年

¹³ 注10所掲書、241頁。

¹⁴ 注10所掲書、242頁。

¹⁵ 注10所掲書、242頁。

¹⁶ 注10所掲書、253頁。

¹⁷ 張資平「曙新期的創造社」(『現代』第3巻第2期、1933年6月、225頁)。原文：「在大學的一年級第一學期，我把《沖積期化石》的前數節寄去請教郭，題名“他的生涯”。郭回信說，“他的生涯”太俗。我便改為“沖積期化石”了。」

11月に張資平は『沖積期化石』を脱稿し、1922年2月に上海泰東図書局から出版した。これは中国近代文学史上、最初の長篇小説である。「沖積期化石」とは地質学の名詞で、張資平は「人類の死後、彼らの遺骸は沖積期の化石となる。」¹⁸と述べている。小説の序言によれば、この小説は張資平の父親への思いをきっかけに作られたものであり、韋鶴鳴という主人公を中心に物語が展開される。小説の視点人物で、韋の友人である「私」と韋鶴鳴は、子供の頃から私塾で教育を受け、続いて教会学校に入り、法政学校を経て、辛亥革命が勃発した後に国民政府に留日学生として選ばれた。小説の後半部分では、日本の風土人情、日本人から受けた差別待遇、学生生活、恋愛の経過などが詳細に描かれている。該作品は刊行後、上海の諸作家から批判を受けた。

例えば、朱自清は「『沖積期化石』は構造が散漫で、叙事も深い印象を与えてはくれず、佳作と言えない。」[陳 2008:248]¹⁹と述べた。創造社同人の成仿吾は1927年8月25日に「この小説は、Compositionに大きな問題がある。首尾の呼応は中間部分の補足的な叙述が長い、力強さが無い。そして末尾の悲しいムードは、不自然に見える。作者の議論も多すぎ、内容も冗漫である。」[陳 2008:248]²⁰と述べ、また沈從文は「『沖積期化石』は手がかりがつかめない。」[陳 2008:248]²¹と批判した。

このように、『沖積期化石』は、長篇小説のデビュー作として成功したとはいえない。しかし、日中の比較文学研究、とくに自然主義文学との関係という視点から再検討するならば、新たな側面を見出すことが可能となる。

その理由は、『沖積期化石』が留学生の生活を題材とし、日中両国の異なる社会背景、風俗人情、青年たちの現状などの、奇抜な素材をもとにした作品であるという点にある。また、該小説は、様々な表現技法—すなわち倒叙、補叙などを用いており、同時代の新文学に共通した文体的特徴を帯びている。『沖積期化石』は韋鶴鳴の身の上話を通して、辛亥革命の不徹底、社会の不平等、教会の暗闇、教育界の腐敗などを風刺するだけではなく、個人の発見、人を中心とする新文化運動の精神を表現した。そうした点から、『沖積

¹⁸ 張資平「沖積期化石」(『資平小説集』、上海現代書局、1933年)。原文：「人類死後，他們的遺骸便是沖積期的化石。」

¹⁹ 陳思廣『中国現代長編小説編年』(四川大学出版社、2008年、248頁)。原文：「“『沖積期化石』結構散漫，敘次亦無深強的印象，似不足稱佳作。”」

²⁰ 注19所掲書、248頁。原文：「這篇小説，Composition上有大毛病，首尾的顧應，因為中間的補敘太長，力量不足。并且尾部的悲哀情調，勉強得很。作者的議論也過多，內容也散漫得很。”」

²¹ 注19所掲書、248頁。原文：「沈從文認為『沖積期化石』頭緒極亂。(《論中國創作小説》，見1935年6月30日《文藝月刊》第5-6期合刊)」

期化石』は新文学における初の長篇小説として、その価値を過小評価することはできないと考えられる。

3 『沖積期化石』における現実依拠性

3.1 事実情報の考察

『沖積期化石』では、「私」と友人の韋鶴鳴の物語が主な内容であり、それは作者である張資平の実際の経験に基づいたものである。張の経験と、語り手「私」と「鶴鳴」の経験を比較してみよう。

小説では、「私」と韋鶴鳴は、子供の頃から私塾で教育を受け、続いて教会学校に入り、辛亥革命が勃発した後一緒に日本に留学し、同じ高等学校に入学した。これらの経歴は全て作者と一致する。張資平は、父親のつくった私塾で学んだ後に、広益中西学堂という教会中学校に進学した。1912年の夏、張は留日学生として選ばれて日本へ渡り、その後熊本第五高等学校に入学した²²。

また、作中には「私」は汽船の中で陳という女性に出会い、彼女に恋心が芽生えたという内容がある。小説の「後序」では、「ある大事なことを諸君に伝えることにする——諸君も急いで聞きたがると思う——それは陳女士のことである。私が東京の大学に進学した後に聞いた噂では、彼女はもう他の人の第三夫人になった。」²³と記されており、小説で「私」が陳と会ったのは、実際に張の経験に基づいたものであると裏付けしている。

また、韋鶴鳴の父親の天厰は極めて重要な人物である。韋鶴鳴は幼い頃に母親を失い、天厰のもとでしっかりした教育を受けた。天厰は、父親と教師という二つの役を務めて韋鶴鳴の思想や気質を感化しつつあった。しかし、韋鶴鳴は留学中に日本人の若い女性と恋仲になり、故郷で待つ中国人女性との見合い結婚を避けるために、危篤に陥った父親の手紙を無視して帰国せず、父の死に目に会えなかった。張資平の実際の経験を見ると、彼は幼いときに母親を失い、私塾の教師だった父親に育てられ、1912年に日本へ留学し、ある日本人の女性と恋仲になり、父親がこの頃に亡くなったものの帰国できなかった²⁴。彼の処女作の『約檀河之水』においても、主人公は留学中に父親を失ったが日本人の恋人のために帰国せず、二年間も父親の墓参りをしなかった不孝を深く後悔している様子が窺え

²² 張資平『資平自伝』（上海第一出版社、1934年）参照。

²³ 注18所掲書、205頁。原文：「還有一件要緊的事要告知諸君的一想諸君也急於要聽——就是陳女士的事，我到東京進大學後才聽見人說，她已經做了人家的第三夫人了。」

²⁴ 張資平「我的創作經過」（『張資平選集』、上海萬象書屋、1936年）参照。

る。

「私」と韋鶴鳴の経験を張資平の実際の経験と結び付けながら検討してみると、張は自分自身を二人の人物に分け、語り手「私」と友人「鶴鳴」を設定したと考えられる。張資平の経歴などの個人情報のある程度了解する読者であれば、主人公は父子家庭で育ち、日本留学の経験があるというような記述から、主人公は作者本人であると認識し始めるであろう。『沖積期化石』には作者自身の経験という現実依拠性を示すテキスト信号が含まれているのである。

3.2 心境描写の考察

さらに、キルシュネライトの前掲書に「無媒介な、いかなる論証の情報によっても準備されていない、もっぱら自分の感想を書き付けるばかりの一人称の主人公の登場」という信号によって、読者はその小説の特殊性に気づき、「なにが話題となっているのかを理解しようとするのならば、作品の背景や、その作品が現実とどのように対応しているのかについて知識を得なければならない。」「キルシュネライト 1992:242」²⁵とあるように、読者はそこから小説における現実依拠性を感じ取り、その小説を私小説として読もうとする。従って、「もっぱら自分の感想を書き付けるばかり」な心境描写は、読者にとって注目に値する重要な信号となるだろう。そこで以下、『沖積期化石』の主人公の心境描写を確認する。

引用①

私はあれこれ考えても彼の考えがわからない。彼はうなだれて一体何を心配していたのだろう！私は凌君の知己とは言えないから、彼のことを理解することができない。凌君！私はあの日、まさか君が学校に戻ってこなくなるとは思わなかった。もしわかっていたら決して君を帰さなかったのに。²⁶

引用②

他人の不幸を見ると、心がぐるぐるとうずまきほど喜ぶが、この不幸が自分の身に降

²⁵ 注 10 所掲書、242 頁。

²⁶ 注 18 所掲書、104 頁。原文：「我左思右想總猜不着他的心思。他低著頭到底在耽心什麼！我算不得是凌君的知己，我果然不能理解他。凌君！我那天真夢想不到你不會再來上學！我若預先知道，我一定不放你回去。」

ってきたら、どんなに辛いか想像しようとしな。このような人も「社会を改造する」、「国の為に国民の為に尽くす」などと言う資格があるのだろうか？公共事業を行う資格などあるのだろうか？²⁷

①と②は、主人公が自分の内なる声を強く叫んでおり、自己の感情をそのままはっきり表していることが読み取れる。次に、③は、父の死に目に会えなかった韋鶴鳴の不孝に関して、「君」に語りかけるという形式をとりながら、実際には自己の心境を述べている。

引用③

取って付けたように「孝」という虚名を得ようとしても誰が信じるのか！君はX市からF海岸に来る間に、何度もこの上なく傷つき、この上なく悲しい悪夢を見た。今日も父親が危篤という知らせが届いたのに、まだ荷物を整えるでもなく、他のすべてを犠牲にして急いで父親に会いに帰ろうとしなかった。君はすでに、あらゆる不孝の罪を犯したのだ！²⁸

心境描写では、「君」という二人称代名詞を使用するという独自の特徴と同時に、主人公すなわち作者の懺悔の心理が窺える。次に、語りの視点という現実依拠性を示すテキスト信号の分析に入りたい。

3.3 視点描写の考察

前述のように、韋鶴鳴と「私」の経験は張資平の実際の経験に基づいたものであり、張が自分自身を二人の人物に分け、「私」と「鶴鳴」を設定したとも見なし得ることがうかがわれた。そうすると、「作者＝語り手＝主人公」という構造が成立する。

そこで、語り手と主人公の視点がどのように示されるのか、視点描写に関する分析に移る。（引用文の下線は筆者による。）

²⁷ 注18所掲書、107頁。原文：「看見他人的不幸，便喜歡到心兒在胸裡不住的旋轉，並不設身處地地想到如果這個不幸移到自己身上來的時候，如何的悲痛。象這種人也配出來談“改造社會”“為國為民”麼？也有資格出來辦公益事業麼？」

²⁸ 注18所掲書、190頁。原文：「假惺惺的妄圖一個“孝”的虛名，有誰相信！你由X市來F海岸其間作了幾回無限傷心，無限悲哀的惡夢，今天又接到你父親的病耗，你還不整行裝，犧牲你一切身外之物趕急回去見父親一面，你已經犯了萬惡不孝之罪了！」

引用①

「吸えなくても大丈夫ですよ。このタバコは吸っても酔わないです。吸っているふりをしているだけです。ほら、私はただ煙を吐くだけで、吸い込んでいないでしょう？」彼女は鶴鳴の日本語の水準が低いと知っているらしく、一字一句ゆっくりと話した。彼女はまた吸い込んだ煙をすべて吐いて鶴鳴に見せた。鶴鳴はどこで彼女のことを知ったのか、まだ思い出せなかった。「君はどうして私の苗字を知っているのですか」と聞こうとしたが、それを日本語にするのは簡単なことではなかった。²⁹

①では、「彼女は鶴鳴の日本語レベルが低いと知っているらしく」と、鶴鳴の推測が表現されている。彼女の内面は描写されず、主人公である鶴鳴の視点から彼女が観察されている。それと同時に、鶴鳴の内面も描写されている。

引用②

陳女士は私を見たが、さっきの椿事を忘れたようで、普段と同じく微笑みで私を迎えた。私は益々悲しくなり、彼女にすまないと思った。³⁰

②では、「さっきの椿事を忘れたよう」で、推量表現で陳女士が外から描写される。前述の通り、この「私」はすなわち主人公を指す。語り手と主人公は共有の視点を持ち、主人公の内面も明かされている。

以上のように、張は語り手の視点を主人公に限定し、共有の視点を示すのと同時に主人公の内面を明かした。また、「らしく」、「よう」でという推量の表現を用いて、主人公の目を通し、他の人物を観察している。主人公と語り手の共有の視点から連想されるのは岩野泡鳴が提唱した描写論「一元描写」である。岩野は評論「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」において以下のように示している。

作者が先づ仲間の一人の気ぶんになつてしまうのである。それを甲乃ち主人公とすれば、作者は甲の気ぶんから、そしてこれを通して、他の仲間を観察し、甲として聞か

²⁹ 注18所掲書、163頁。原文：「不會不要緊，這種煙吃不醉的。吸着裝體面的。你看我只呼煙。誰會吸呢？」她像知道鶴鳴日本話程度低，一字一句的慢慢說。她還把所吸進去的煙通吐出來給鶴鳴看。鶴鳴還沒想出在什麼地方認得她，想問她“你怎麼知道我的姓？”但要翻譯成日本話有點不容易。」

³⁰ 注18所掲書、24頁。原文：「陳女士看見我，好像忘了剛才那椿事似的，還是和平時一樣，拿微微含笑的臉兒來迎我。我心裏益覺得難過，對不起她。」

ないこと、見ないこと、若しくは感じないことは、すべてその主人公には未発見の世界や孤島の如きものとして、作者は知つてゐてもこれを割愛してしまうのだ…これが僕の小説家並に批評家として主張し実行して来た態度である。³¹

吉田精一は「一元描写」について、「作者がまず作中人物の一人甲となり…甲が作者主観の仲介者であり、主観移入の中心であるとともに、乙丙もまた甲を通しての、作者主観の二次の対象であることだ」[吉田 1958:453]³²と分析している。つまり、主人公一人から見た世界しか描写することができず、主人公の考えしか描写できないのだ。『沖積期化石』における視点描写は、この岩野の「一元描写」論に符合するところがあると考えられる。「一元描写」論発表直後、中村星湖、前田晃、土田杏村などからの批判が殺到した[伴 1962:110]³³。中村星湖は、「観察点の移動は芸術圏内の自由である」と提唱したが、それ以前に中村は「作の形式と日常生活の姿」³⁴で作中の観察点について「観察点を自由自在に、甲の人間から乙の人間に、乙の人間から丙の人間にと移し合ふ時はそれこそ色々複雑なものは書けるだらうけれども、見るものが見たら、如何にも想像でこしらへたやうな物しか出来なくて、不自然な、無理な形になつて来る。」と言いつつも、また次のようにも述べている。

なほなほ物を観るのに、両方面から観なければならぬ場合には、勿論観察点は二つ置いても、三つ置いても差支ない事である。観察点は、必要な場合は、多く置いても差支ないのであるから、よく其の場合々々を考へてやつたならば、さう不自然な、無理なものは出来てこないだらうと思ふ。

両者は一見、まったく異なる考え方のようだが、中村は「一元描写」を柔軟に捉え、必要に応じて複数の観察点をもった多元的な描写を容認したとも言える。つまり、ある部分ではある人物に視点が固定され、その人物が見たもの、考えたことしか描写できないのだが、別の部分では別の人物に視点に移り、同じような一元的制約を受けるというものである。そうした論争を踏まえた上で『沖積期化石』を読み返すと、主人公が不在のシーンが複数あることに気がつく。

³¹ 岩野泡鳴「現代将来の小説的発想を一新すべき、僕の描写論」(『泡鳴全集』第10巻、国民図書、大正11、544頁)。

³² 吉田精一『自然主義の研究 下巻』(東京堂出版、1958年、453頁)。

³³ 伴悦「岩野泡鳴研究史ノート」(『国文学研究』26、1962年10月、110頁)参照。

³⁴ 中村星湖「作の形式と日常生活の姿」(初出:『文章世界』6、明44・4)。

引用③

凌啓雲は五日間連続で畑で過ごし、今日の午後、ようやく母の担当する耕作地を灌漑しおわった。とても疲れた。晩飯を食べ、入浴すると、早々に寝台に入った。母は豆のような灯光のもとに座り、机に置いてある銀錢と銅錢を見て、指で一個ずつ数えている。「早く寝なさい！」彼女は怒った様子で、いつものように穏やかではなかった。

35

③は①②とは異なり、主人公の視点外の描写である。「とても疲れた」というように、地の文で凌の内面が描写され、また「彼女は怒った様子で」と凌の視点から母親を観察している。主人公が現れないこの部分では、主人公以外の人物の主観に視点が限定されている。これは中村が唱えた多元的「一元描写」の特徴に一致する。

引用④

彼女の最後の覚悟は、申牧師の良心を感動させることができなかつたら、このあわれな嬰兒を神に差し戻し、神の処置に任せるしかないというものだった。そこに思い至ると、熱い涙が尽きぬ泉のように、こんこんと彼女の蒼白い頬を経て、ポタポタと嬰兒の頭の上に滴り落ち、嬰兒の涙の泉が湧き出た。彼女（嬰兒）は母が一人で涙するのを見るに堪えないようだった。³⁶

④も③と同様、主人公以外の人物である「彼女」の内面が描かれ、「彼女（嬰兒）は母が一人で涙するのを見るに堪えないようだった。」というように、「彼女」の視点から嬰兒が観察されている。

『沖積期化石』には、③④のように主人公が不在の場面がしばしば現れる。また、パートごとに主人公以外の人物に視点が移動する現象もあることがわかった。『沖積期化石』は、こうした多元的「一元描写」の表現に一致すると考えられる。

岩野の「一元描写」論における主人公と語り手の共有の視点が保たれている点に関して、

³⁵ 注18 所掲書、113 頁。原文：「凌啓雲一連踏了五天，今天下午才把他媽擔任耕種的秧田灌漑完了。疲勞的很，吃過了晚飯，洗過了澡，早早的爬上睡榻去了。他媽媽坐在如豆的燈光下，望著檯上擺的幾個銀角子和銅錢，按著指頭一個一個的算。“你快點兒睡覺罷！”她像生氣似的不像平日說話平和。」

³⁶ 注18 所掲書、85 頁。原文：「她這最後的覺悟，若仍不能感動申牧師的天良，她只能把這可憐的嬰兒交回上帝，聽憑上帝的處置。她念及此，她的熱淚像不竭之泉滾滾的經過她的一對蒼白的頰，一滴一滴的滴在嬰孩頭上，再把嬰孩的淚泉挾開。她（嬰兒）像不忍看她媽媽獨一個人流淚！」

キルシュネライトは、私小説の構造要素の一つである「焦点人物」と主人公と語り手の関係を指摘する。

「焦点人物」は、一人称の語り手と主人公と作者との単なる連合体以上のものである。〔中略〕語りの技法から見ると、「焦点人物」という構造要素は、「語り手すなわち主人公」という「共有の視点」がほぼ保たれている点に現れている。すなわち、作者は主人公の内面を明かしてくれるが、他のあらゆる登場人物は「外から」描写されるに過ぎない。³⁷

キルシュネライトの説明は、まさに岩野泡鳴「一元描写」論と一致する。氏が述べた主人公は、岩野のいわゆる「甲」に対応し、その他の登場人物を「乙」、「丙」とすれば、「甲が作者主観の仲介者であり、主観移入の中心である」（吉田精一）³⁸、いわゆる「作者は主人公の内面を明かしてくれる」（キルシュネライト）³⁹との考えに該当するし、「乙丙もまた甲を通しての、作者主観の二次的対象であることだ」（吉田精一）⁴⁰、「他のあらゆる登場人物は「外から」描写されるに過ぎない。」（キルシュネライト）⁴¹と重なることになる。氏はさらに、私小説における語り手と主人公が「共有の視点」に従わないという現象も指摘する。

多くの場合これは、語り手が他の登場人物の背後にまわり、言わば「背後からの」視点を持ち込むことによって、破られている。〔中略〕このような場合はたいがい、主人公に近い人物の考えや感情が描かれており、それによって主人公は、そうしたことがらについてあるていど語る資格をもっていることを読者に納得させるのである。⁴²

私小説では、共有の視点が存在しないものの、「主人公に近い人物の考えや感情が描かれる」という場合が認められるのである。『沖積期化石』にもこのような主人公に近い視点変換現象がある。引用⑤は鶴鳴が私塾に入り、他人の教本を羨ましく感じて、母にねだる場

³⁷ 注10 所掲書、249 頁。

³⁸ 注32 所掲書、453 頁。

³⁹ 注10 所掲書、249 頁。

⁴⁰ 注32 所掲書、453 頁。

⁴¹ 注10 所掲書、249 頁。

⁴² 注10 所掲書、250 頁。

面である。

引用⑤

彼女は息子をあやして泣くのをやめさせた後、この可愛い、普段は大人しく母親の話を聞く小さな鶴鳴が、なぜ突然こういう態度を示したのか黙って考えていた。そこに思い至ると、私塾に対する信仰心がすぐ消えてしまった。⁴³

息子の願いを好ましくないものと感じた鶴鳴の母親の内面が比較的はっきりと描写され、主人公の視点外描写でありながら、その視線は、主人公に近い存在からのものであることがわかる。主人公鶴鳴に近い母親の視点による描写は、私小説と同じような視点の変換がなされていると考えられる。このように、張資平は「主人公に近い人物の考えや感情が描かれる」ような私小説に独特な現象に気づき、それを自作に採用したのではないだろうか。張は主人公と語り手の共有の視点、限定される視点変換現象という現実依拠性を示すテキスト信号を『沖積期化石』に書き込んだものと考えられる。

4 『沖積期化石』の独自性

このように、『沖積期化石』には私小説的な特徴が顕著に見られるが、作品を精読すれば、日本の私小説と異なる点もある。その一つは、私小説の閉鎖性、すなわち作者が自分の小さく狭い世界の中で創作することから脱却し、より広い社会全体とつながろうとする点である。もう一つは、作者の「自己表現」を求める描写が少ないことである。

王向遠は、創造社が日本の私小説から借用したのは文体であり、内容には違いが存在すること、同じく家庭を書き、個人の身の周りのことを書くにもかかわらず、日本の私小説は閉鎖的で、個人や家庭と社会とのつながりを表現する意図はほとんどない一方、中国の私小説は作者個人や家庭と社会との関連を重視している〔王 1996:3〕⁴⁴ことを指摘している。彼はさらに、「これらの作品には、不公平な醜い社会に対する作者の怒りや非難が随所に見られる。彼らはしばしば社会批判者の立場で、個人の運命を国家、社会と結びつけて考えている」〔王 1996:4〕⁴⁵と述べている。

⁴³ 注18所掲書、31頁。原文：「她哄她的兒子止住了哭之後，她暗想她這很可愛的，平日很聽從母親的話的小鶴鳴，怎麼忽然會有這種態度。她想到這點，她對那個蒙塾的信仰心即時消滅了。」

⁴⁴ 王向遠「文體與自我：中日“私小説”比較研究中的兩個基本問題新探」『四川外語學院學報』4、1996年、3頁。

⁴⁵ 同上論文、4頁。

『沖積期化石』の後序には、『沖積期化石』は著者の長篇処女作であり、中には硬い語調と短絡的な批評がたくさんある。それは著者の短所と言ってもいいし、長所と言ってもいい。⁴⁶と記されている。後序の述べるとおり、小説には物語の展開とともに、張資平の批評も何ヶ所かに織り込まれている。例えば最初の政治批判は、以下のようなものである。

「村で最も光榮ある地位にいる「知県」よ！村で最も權威ある「知県」よ！村人に羨ましがられ崇拜される、美しい名称よ！」⁴⁷で始まり、続いて「知県」の村民に対する残酷な搾取が猛烈に批判される。「あなたたちのような美しい名前を手に入れた人が、特権で役場に出入りし、善悪をひっくり返せるのではないか？あなたたちのような美しい名前を手に入れた人が、「紛争の調停」を利用して村民を搾取するのではないか？」⁴⁸

二人称を用い、皮肉を込めた反語文の繰り返しで一氣に畳みかける修辭法である。段階的に文の勢いを強めながら語り手の憤りが示され、中国の封建社会における官僚の横行や権力的専制が鋭く批判されるのである。

また、『沖積期化石』では、宗教に関する見解が何度も小説に現れる。「私たちは宗教を求めるが、宗教は私たちを求めることができない。神の下僕となるのもよい。だが教会の奴隷となるのは間違っている。宗教を曲解し、新旧約聖書を理解していないキリスト教徒たちはその道理がわからないので、皆教会の奴隷となっている—宣教師や牧師の奴隷となっている—国民の義務を果たしていないのに、政府の奴隷となってしまった無意識の愛国者のようだ！」⁴⁹と、教会の暗闇、牧師の偽善を告発し、猛烈に批判している。例えば、注目される人物は牧師の申国士である。申国士は、旧式の中国人ではあるものの、西洋の宗教関係の仕事に従事している。彼は、「杯盤の表だけきれいにする」⁵⁰という偽善者で、教会の信徒たちばかりか、娘さえも騙して殺害するような人物である。金を儲けるために娘を売り、表向きはその罪を隠しているという悪い宗教者イメージが浮き彫りにされている。

さらに、張資平は日本で差別を受けたが、小説では自分の苦悶や悲憤などを描写せず、

⁴⁶ 注 18 所掲書、205 頁。原文：「“沖積期化石”是著者的長篇處女作，有許多生硬的句調和武斷的批評，說是著者的短處可以，說是長處也可以……」

⁴⁷ 注 18 所掲書、45 頁。原文：「占有村中最上光榮的“知縣”喲！占有村中最高權威的“知縣”喲！能引起村人羨慕崇拜的美名稱喲！」

⁴⁸ 注 18 所掲書、46 頁。原文：「有了你們這種美名稱的人，不是有特權出入公門顛倒是非麼？有了你們這種美名稱的人，不是利用“排難解紛”來魚肉鄉民麼？」

⁴⁹ 注 18 所掲書、58 頁。原文：「宗教是維持人類的規則生活的一種人類社會的設備，先有了人類生活，然後有宗教。換言之是我們要求宗教，宗教不能要求我們。做神的僕人可以，做教會的奴隸就錯了。一班曲解宗教，吃新舊約不消化的耶穌教信徒，不明白這個道理，所以都做了教會的奴隸—做一班宣教師和牧師的奴隸—象一班無意識的愛國者，還沒盡國民的義務，倒先做了政府的奴隸！」

⁵⁰ 注 18 所掲書、63 頁。原文：「單洗淨杯盤外面」

その代わりにこのように批評している。

中国人留学生は日本人から輕蔑されると齒を食いしばって罵った。実は怒る必要もない！我々はまず自身の行動が輕蔑されているかどうかを反省すべきだ。もしそうだとすれば、改善すべきで、日本人の輕蔑を良藥として考える。もし輕蔑されるような行動がない場合、日本人の輕蔑は私達個人ではなく、私達の国に対する輕蔑ということになる。となれば怒る必要は更になく、ただ努力するだけで十分だ。⁵¹

語り手は祖国の富強を願いつつも、国民性を批判することで理性的な愛国心を表現している。

君たち血の氣の多い学生は、日本に向かって「わが国が強くなったら、お前と戦ってやる」と常に言っているのでは？しかし、日本人から「貴国はいつまで強くなるのか？」と逆に問われたら、どう答えるのか？真面目に実力を涵養せずに口論で勝負しようとするのは我が国民性の大きな欠陥だ！⁵²

一方、創造社の同人郁達夫の身辺小説「沈淪」（泰東書局、1921年）は、主人公の中国人留学生が、弱国の国民であるがゆえに強国日本で受けた屈辱と、精神的にも生理的にも苦悩する姿を描いている。小説の結末で主人公は祖国の貧弱さを嘆き、「祖国よ、祖国よ！私の死はお前のせいだ！お前は早く豊かになってくれ、強くなってくれ！お前にはまだ苦しんでいる子供がいるのだ！」⁵³と祖国のために自死を決意する。強い社会意識が含まれており、日本の私小説の基準からすれば、この部分は私小説の範疇から外れるであろう。

⁵¹ 注18所掲書、149頁。原文：「中國學生受了日本人的輕蔑，便咬牙切齒痛罵起來。其實何苦生氣！我們當先反省私人的行動有受他輕蔑的沒有。如果有，就應當改過，日本人的輕蔑當他是一種良藥。若沒有受輕蔑的行動，那嗎日本人的輕蔑便是輕蔑我們的國家，不是輕蔑我們個人；我們更不必生氣，只潛心努力就夠了。」

⁵² 注18所掲書、150頁。原文：「你們血氣未定的學生們不是常對日本說“我國富強之後就和你打一仗”。但日人反問你“貴國到什麼時候才富強呢？”你又怎麼樣的答應他呢？不認真涵養實力，徒借口舌爭衡，要算我國民性的一大缺點！」

⁵³ 郁達夫『沈淪』（花城出版社、1982年、57頁）原文：「祖國呀祖國！我的死是你害我的！你快富起來，強起來吧！你還有許多兒女在那裡受苦呢！」

同じく日本で生活難と民族差別に苦しめられた同人の郭沫若は、身辺小説「行路難」（『東方雑誌』、1925年）で主人公愛牟の口調を借りて内心の憤懣を吐露する。愛牟は自分が「支那人」であるために、家の賃貸を断られる。悲憤と絶望のあまり、彼は慨嘆せずにはいられなかった。

日本人よ日本人よ！君たち日本人は本当に恩知らずの人種である。我々中国が君たちに何をしたと言うのだ、ここまで我々を蔑視しようとは？君たちは単に「支那人」という三文字を口から吐き出すだけで、既に我々に対する最大の悪意を曝け出しているのである。⁵⁴

王向遠は「郁、郭の初期小説は、個人の苦悶、孤独感や感傷を描いているが、孤独や感傷を心の奥底で噛みしめる日本の私小説作家とは異なり、彼らの境遇、彼らの実体験によって、これらの自我の感情表現を時代や社会と密接に結びつけるようにしている」〔王 1996:4〕⁵⁵と指摘する。『沖積期化石』においても政治批判や教会批判、国民性批判など間違いなく自己の内面が社会とつながっているものの、郁や郭の初期小説における強い民族感情と比べるならば、日本で差別されても自分を憐れんだり、悲鳴をあげたりするのではなく、中国人として実力を養い、向上に努め、自己反省をすべきだと冷静に分析しており、日本人と中国人との間に明確な境界線は引かれていないように見える。

次に『沖積期化石』には「自己表現」の描写が少ないという特徴を見てみよう。日比嘉高は「自己表現」という言葉を説明する際、多くの論説を挙げ、「秋江、岩城（評論者）いずれもが自然主義文芸とそれ以前の文芸との差異を述べるにあたって「自己」という概念を鍵とし、「自己」と作品との連関性や告白性を重視している」〔日比 2001:72〕⁵⁶と指摘する。また、苗鳳科によれば、私小説は日本においては近代的自我の表現であり、その自我意識の目覚めとされる自然主義小説に引き続き、「個」をありのまま描き出したところに近代的自我の成熟を示している〔苗 2021:198〕⁵⁷という。以上の論説からわかるように、

⁵⁴ 郭沫若『郭沫若全集』文學編第九卷。（人民文學出版社、1985年6月、308頁）原文：「日本人啲！日本人啲！你忘恩負義的日本人啲！我們中國究竟何負於你們，你們要這樣把我們輕視？你們單是在說這“支那人”三個字的時候便已經表示盡了你們極端的惡意。」

⁵⁵ 注44所掲論文、4頁。

⁵⁶ 日比嘉高「『自己表象』誕生の文学史的研究」（筑波大学、博士（文芸・言語研究科文学専攻）、2001年3月、72頁）。

⁵⁷ 苗鳳科「80年代の中国における私小説の受容：田山花袋『蒲団』への読解から」（『JunCture：超域的日本文化研究』12、2021年3月、198頁）。

「自我」は私小説の出発点となり、私小説は「自己表現」を重視することが特徴とされている。しかし、私小説的特徴を湛えた『沖積期化石』には果たしてこの「自己表現」があるだろうか。

創造社の同人である鄭伯奇は、張資平について、「張資平の作風は、沫若、達夫と全く異なっている」、「彼が文章を作る態度はかなり客観的である」[鄭 1933:5]⁵⁸と述べている。しかし、張資平の作品にも、「主観的な感情が時折爆発する」[鄭 1933:5]⁵⁹、叙情的なものがあることは否定できない。例えば、前述の通り、『沖積期化石』にも心境の描写は存在するがきわめて少ない。作者がひたすら感慨を吐露していくのではなく、あくまでも写実的な叙事に基づいて少し叙情的な部分を挿入しているという印象である。

『沖積期化石』には、「私」の膨れ上がった情欲の描写がある。

顔を彼女の顔の側に近づけて話している時、声も震え、体も軽くなり、両頬にも熱を感じた。心房の血は、加速度がついたように、大動脈から奔騰してきた。吸い込んだ空気は二度と気管に至らず、海風に吹かれると、肺葉が沸き、胸がわずかに痛くなった。陳女士のこの時の態度は完全に私と同じで、ぎゅっと私の手を握っていた。私はそれに乗じて、彼女の薄紅色の頬にキスした。⁶⁰

張の『文芸史概要』には、「人間は一種の生物で、その思想行為はほとんど生理状態に支配されている。そこで、人間を観察するにはまず生理的な方面から描写すべきである」⁶¹とある。『文芸史概要』に述べた通り、「心房の血」「大動脈」「肺葉」など作中人物の生理的反応を積み上げることで、抑えられない情欲を現前させることに成功している。

それに対して、郭沫若是身辺小説「喀爾美蘿姑娘」（『東方雜誌』、1925年）で自分の欲望と罪惡を赤裸々にさらけ出した。主人公には妻がいるがカルメラを売る日本人の少女と恋に落ちてしまい、現実と家庭の責任という制約の中で苦しむあまり、ついに自殺するこ

⁵⁸ 注2所掲書、5頁。原文：「張資平の作風，和沫若、達夫迥不相同」「寫作態度是相當客觀的」

⁵⁹ 注2所掲書、5頁。原文：「主觀的情感不時爆發。」

⁶⁰ 注18所掲書、23頁。原文：「我只覺得我把臉湊近她臉旁邊說話的時候，聲音也顫了，身體也輕了，兩頰也發起熱來了；心房的血，像得了加速度，由大動脈竄奔騰出來；吸進去的空氣，再也達不到氣管支，給海風一吹，肺葉激動過度，胸前隱隱的發痛。陳女士此刻的態度，完全和我一樣，只緊緊地握著我的手，我趁勢在她桃紅頰上，接了一個吻。」

⁶¹ 鄒基瑞・王錦園『張資平—人生的失敗者』（復旦大学出版社、1991年、188頁）からの引用による（初出は『文芸史概要』武昌時中合作書社、1925年）。原文：「人類是一種生物，其思想行為多受生理狀態支配。所以一觀察人類先要由生理的方面描寫。」

とになった。主人公の抑えられない情欲は作品中にちりばめられていると言っても過言ではない。「ああ、私の邪念、私の邪念、彼女はそれを見抜いているに違いない！彼女は目を伏せて顔が耳のあたりまで赤くなった。可愛い処女の紅！人を狂わせる処女の紅よ！ああ…」⁶²。このように、郭沫若の主人公が自分の心境を暴露するとき、「ああ」や「おお」などの強い感情を込めた感動詞を添えたり、単語を繰り返して感情を強めたりすることが多い。

郁達夫の「沈淪」では、主人公は肉欲を満足させるため若い仲居のところで初体験したのち、自分を痛罵して自殺の決意をした。「なぜあんな所へ行ったのだ。おれは最下等の人間に成り下がってしまった。悔やんでも、もうおそい。死のう。」⁶³主人公は遊女屋を出ると、起こったことを思い返し、後悔や自己嫌悪の気持ちを飾らず告白した。大東和重は、「中国の新文学は、文学の規則をこの「自己表現」へと絞っていく。…そこに颯爽と登場したのが、郁達夫の『沈淪』だった」[大東 2012:34]⁶⁴と述べている。郁と郭は感情表現、自己表現を重視していることが窺われる。朱寿桐は郁と郭の身辺小説について、「彼らに描かれた主人公はいつも感傷的で、弱々しく、情緒に溢れ、涙もろく、哀叫している…」[朱 1989:67]⁶⁵と述べている。しかし、張資平は郁達夫、郭沫若のように大量の内心の独白や感情の吐露で小説を構成するのではなく、厳格なる「写実」という原則に従った。主人公の生活苦や情欲の描写も客観的であり、大げさな感情表現は使われない。郁と郭は、哀愁の感情表現に過剰にこだわり、客観的生活の真実を見落としがちであった。それに対して、張資平は物語の筋を重視し、生活の出来事そのものを描くことで生活の重みを伝えようと努め、同情に値する人物を生活の苦境から積極的に解放しようとした。前述の通り、『沖積期化石』には日本留学中の中国人学生が受けた差別が描かれているが、張資平は作品で内心の苦痛を訴えるのではなく、客観的に解決策を示したのである。

『沖積期化石』の後序に、「私たちの高等学校生活は、この『沖積期化石』と同時に終わった。高等学校を出て大学に入ってから生活は、機会があれば諸君に報告しよう。」⁶⁶と書かれている。ここからわかるように、張資平がこの小説を書いた目的は、日記を記すよ

⁶² 注 54 所掲書、210 頁。原文「啊，我的惡念，我的惡念，她定然是看透了！她把眼低垂下去，臉便暈紅了起來，一直紅到了耳際。可愛的處女紅！令人發狂的處女紅喲！啊啊…」

⁶³ 注 53 所掲書、56 頁。原文：「我怎麼會走上那樣的地方去的，我已經變了一個最下等的人了。悔也無及，悔也無及。我就在這裡死了吧。」

⁶⁴ 大東和重『郁達夫と大正文学—「自己表現」の時代へ』（東京大学出版会、2012 年、34 頁）。

⁶⁵ 朱壽桐「“脱了軌道的星球”——論創造社作家張資平」（『文學評論』1、1989 年、67 頁）。

⁶⁶ 注 18 所掲書、205 頁。原文：「我們的高等學校生活和這篇《沖積期化石》同時告終。我們出高等進大學後之生活，要待有機會時再報告諸君。」

うに日常生活をそのままに小説に書き込むことにあり、個人を暴露するというより、社会の出来事を記述する傾向が強いと言えよう。城山拓也が「張資平は、一九二〇年代における社会体制の激変の中で、多くの新文学者とは異なる立場から、青年たちを新しい社会にいざなおうとしていた。彼は小説創作にあたって、創造社のメンバーの目指す『自己表現』よりも、一九二〇年代当時の近代社会の情報を書くことに、リアリティを見出していたのである」[城山 2014:79]⁶⁷と指摘した通りだと考えられる。

おわりに

張資平の留学時期に作成した小説には、日本自然主義文学、さらに私小説との密接な関係が認められる。本論では、張の自伝的色彩を帯びる長篇小説『沖積期化石』を中心に、小説に潜在する私小説的要素を分析し、さらに作品の独自の表現の特徴を明らかにした。

宇野浩二は「作者と読者の間の暗黙の了解」という角度から、私小説の定義における読者の役割を指摘した。また、私小説を読者という観点より分析するのであれば、読者がある作品を私小説と見なす基準、読者が何によって私小説と判断するのかについて、キルシュネライトによる私小説の判断基準の提起に基づき、『沖積期化石』において、作者の身分や経歴の事実情報、作者の心境、共有の視点及び限定される視点変換現象などの現実依拠性を示すテキスト信号が存在することを検証した。

さらに、視点描写の考察において、主人公と語り手の共有の視点が保たれている点に関しては、岩野の「一元描写」論が想起される。小説には「作者＝語り手＝主人公」という私小説の特殊構造が存在していること、そしてそうした特徴は岩野泡鳴の「一元描写」論に類似していることを明らかにした。一方、「一元描写」論の批判者である中村星湖は「一元描写」を柔軟に捉え、必要に応じて複数の観察点をもった多元的な描写を容認した。『沖積期化石』には、主人公が不在の場面がしばしば現れる。これらの場面は、パートごとに主人公以外の人物に視点が移動する現象が認められる。『沖積期化石』は、こうした多角的「一元描写」の表現に一致すると考える。また、私小説には、「主人公に近い人物の考えや感情が描かれる」という「共有の視点」に符合しない場合があり、『沖積期化石』にもこのような主人公に近い視点変換現象が認められる。

⁶⁷ 城山拓也「張資平と憧れの近代—『資平小説集』と『資平自選集』」（『中国モダニズム文学の世界—一九二〇、三〇年代上海のリアリティ』、勉誠出版、2014年、79頁）。

また、『沖積期化石』には日本の私小説的要素があるものの、私小説の特徴をそのまま受け継いだわけではなく、一定の改変が加えられたと考えられる。張資平作品が模倣したのは、日本の私小説の外形的なものであり、「自己表現」という特徴は受容されることがなかった。本作において、張資平は中国の社会状況に関心を持ち、個人と社会とのつながりを表現しようとした意図が窺える。張は留学生活や自由恋愛を描写する際、自分の内面を赤裸々に告白する、つまり「自己表現」を追究するよりも、むしろ社会に関する情報を伝えることを重視していたのである。日本の私小説をもとにしつつ、日中両国の異なる社会事情によって言わば取舍選択を行った点にこそ張の独自性が存在するのであり、そうした特徴が次作以後どのように変化を遂げるのか、稿を改めて検討を続けることとしたい。

付記：本論文は、2022年6月に日本現代中国学会2022年度関西部会大会で口頭で報告した内容に基づき執筆したものである。

参考文献

中国語（拼音順）

- 陳思廣 2008『中国現代長編小説編年』四川大学出版社。
- 鄂基瑞・王錦園 1991『張資平—人生的失敗者』復旦大学出版社。
- 王向遠 1996「文體與自我：中日“私小説”比較研究中的兩個基本問題新探」『四川外語學院學報』4,1-6。
- 巫小黎 2005「身邊小説：現代知識者的角色轉換、身份認同與自我意識」『文學評論』1,172-177。
- 朱壽桐 1989「“脱了軌道的星球”—論創造社作家張資平」『文學評論』1, 61-70。
- 周海林 2016『創造社与日本文学—關於早期成員的研究』上海社会科学院出版社。
- 鄭伯奇 1935『中国新文学大系・小説三集・導言』上海良友圖書公司。

日本語（五十音順）

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト 1992『私小説—自己暴露の儀式』平凡社.

大東和重 2012『郁達夫と大正文学—「自己表現」の時代へ』東京大学出版会.

蔡曉軍 1996「創造社文学の形成と日本—同人と日本との関わりを中心に」『実践国文学』
49,60-73.

城山拓也 2014『中国モダニズム文学の世界——一九二〇、三〇年代上海のリアリティ』勉
誠出版 第一章「張資平と憧れの近代—『資平小説集』と『資平自選集』」.

鈴木登美著、大内和子・雲和子訳 2000『語られた自己：日本近代の私小説言説』岩波書店.

張競 1995『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店.

苗鳳科 2021「80年代の中国における私小説の受容：田山花袋『蒲団』への読解から」
『JunCture：超域的日本文化研究』12, 188-202.

吉田精一 1958『自然主義の研究 下巻』東京堂出版.

李佳 2018「中国の近代小説における日本の私小説的要素—創造社の身辺小説と魯迅の自
我小説を中心として」東北大学, 博士（国際文化）.

林麗婷 2019『中日近代文学における留学生表象—二〇世紀前半期の中国人の日本留学を
中心に一』日中言語文化出版社.

（神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程）